

## 「シンガー&ソングライター」との仕事が中心

僕は、シンガー&ソングライターとの仕事を中心にアレンジャーとして活動をしてきました。それは、早い時期からどこかで「プロデュース」ということを考えていたからだと思います。

たとえばアイドルとの仕事であれば、本人はカラオケ完成後にただ歌入れに来るだけで、僕とはなんの接点もなく仕事は進んでいきます。もし、僕がアレンジャー業だけを求めているのならば、そのほうが効率的ですから、どんどんやっていったと思います。

でも、これがシンガー&ソングライターとの場合はまったく変わってきます。アーティストと曲に対する話をするのももちろん、もつと踏み込んだ関係で仕事をすることになる。そんなふうに、アレンジだけの場合でも、歌い手の人間性まで掘り下げた作品づくりをしたいと思っていたのは、やはりプロデュースという意識があったからだと思います。

僕がシンガー&ソングライターと仕事をするのは、その作品に彼ら、彼女らの個性や人となりが出てくるからです。それがフィクションでもノンフィクションでも、アーティストが自身の身体を通して生み出すもので作品を成り立たせようとしているなら、僕は彼らのその思いを踏まえたうえで仕事をしなければいけない。その作品が世の中に出た時のアーティストのあり方までを含めて、プロデュースしなければいけないと考えているんです。

す。

ですから、一度に多くの作品とかかわることはできないんです。90年代に一度、吉田拓郎、長渕剛、中島みゆきのアルバムをつくったことがあります。その一年はちよつと狂いそうでした（笑）。

## 仕事は全部つながっている

僕は、仕事を始めた頃、ディレクションからレコーディングのセッティング、プロモーションなどあらゆることをやりました。僕のなかでそれらは全部、ひとつのつながった仕事なのです。アレンジだけの仕事をしている時にも、ほかの部分にも口を出していました。自分があらゆることをやっていた経験があるので、「ここがちよつと足りない」と気がついてしまうんです。そして、気がついたことに対してフォローするようなことをいろいろとやっていました。だから、僕が「アレンジャー」と言う時には、一般的な概念に合わせおいたほうが話が簡単でわかりやすいからそうしているだけで、真の意味では、ディレクション、プロデュースなど、アレンジ以外の工程も含んでいるんです。

いまの人たちは、「これは自分の担当だけ、それは違う」と、自分の仕事に線引きをする意識が強いかもかもしれませんが、僕は仕事はボーダーレスだと思っています。会社など